

唐招提寺金堂本尊台座の鎌倉期の修理

美術工芸研究室

美術院資料にもとづく調査として、昭和46年7月、唐招提寺金堂本尊盧舎那仏及び千手観音を調査したが、奈良時代当初と考えられている本尊台座について気づいた点があったので大略を報告する。

台座の補修部分 本尊台座は、葺蓮弁十二枚六段魚鱗葺蓮華座で、上から蓮華、円形上敷茄子（葺軸）、八角二段上框、八角下敷茄子、受座、反花、蹴込付八角二段框座からなる。上框は布貼りの漆箔であり、下敷茄子は、隅に堅材を釘打ちにしてあるが、その表面だけが布貼漆箔である。しかし、それ以下の反花とその下の框座部分は、材に布を着せず、材、形状、処理の仕方、風化の度合において、奈良期のものとは認め難く、鎌倉時代と推定される。

第1図 唐招提寺金堂本尊

蓮弁の描画 各蓮弁全てに一釈迦が画かれてあったと推察されるが、現在は僅かに五弁にのみ墨描を残す。しかしこの墨画は、千体の化仏を取り付けた光背の丹念な仕事に比べると、まことに簡略なもので、後補ではないかと考えられる。

蓮弁の葺き方 蓮弁は葺軸を用いず、各弁の上下2か所ずつ4か所を釘で蓮肉側面に直接打ちつけ、十二枚六段魚鱗葺きにす。これは必ずしも当初からの葺きかたとは断定できない。各段の各蓮弁の最大幅をみると、ばらつきがめだつので、蓮弁は製作時の状態からかなり動かされていると思われる。

台座の意匠 本尊台座の意匠は、本尊光背の華麗な意匠および千手観音像の千手、或いは薬師のものと光背（護国寺本諸寺縁起集の「招提建立縁起」には七仏日光月光十二神将を付けていたとある。）等を考慮すると、金堂本尊の台座としては簡素にすぎる。

鎌倉期の修理時期 本尊胸部の箔下地に朱色を置いた部分は、明らかに江戸修理であるが、本尊が鎌倉期にも修理されていることは、「招提千歳伝記」旧事篇および「唐招提寺記録法蔵」に記す永仁2年の本尊修補完成供養の記事によって知られる。

以上の点から、本尊台座は、本体、光背と共に奈良時代の当初ののものと考えられているが、鎌倉期の修理によって、台座の当初の姿がかなり改変された可能性が考えられる。この台座の意匠は、法隆寺西門堂薬師の台座、伝法堂の阿弥陀三軀の台座等の意匠との親近性が考えられ、また鳳凰堂阿弥陀如来の台座とも類似するところがあり、その点、鎌倉修理がいに関与しているのかなど、なお今後の検討が期待される。

（星山 晋也）